

## 名作の舞台の意外性あれこれ

前回までの連載『赤毛のアン』の舞台は、主人公アンが「世界で最も美しいところ」と言ったカナダのプリンスエドワード島でした。彼女がマシューとマリラと暮らしたグリーン・ゲイブルズは、作者モンゴメリーの親戚が実際に住んでいた家で、現在は小説の記述どおりに再現され、100年前の息づかいが感じられるようになっています。

文学作品にはその物語の舞台が現れてきます。作者はその模様を詳細に描写していくことによって、小説に現実感が出てくるわけです。ここで「文学作品の舞台」について面白いエピソードのいくつか紹介してみましよう。

### 「ロミオとジュリエット」

**ジュリエット**：おお、ロミオ、ロミオ！なぜあなたはロミオなの？お父上に背き、その名を捨てておくれ、さもなければ、それができないなら、せめて愛の誓いを、そうしてくれさえしたらもうこの身はキャブレットではない。バラの花を別の名前で呼んでみても甘い香りは失せはしない。ロミオとて同じこと、ロミオと呼ばれなくても、その完全無欠のお人柄は名前を離れて残ろうものを。

**ロミオ**：恋の軽い翼を借り、その石垣を飛び越えたまでのこと、石の衝立で恋は遮れぬ。  
(福田恒存訳)

ジュリエットが胸の中を吐露したベランダ。その告白を隠れて聞いていたロミオ……。私はこの物語の舞台を5年前に訪ねました。イタリア・ベローナ。街全体が世界遺産に指定されていて、大型バスは石畳の道路を傷めるということで不可、訪問者は徒歩による見学です。

お目当てのキャブレット家へ。4メートル幅ほどの石畳の道路から門を入ると、その両側の壁には世界から訪れた恋人たちの愛の言葉を書いた紙が貼られていました。その数、数百枚、いや数千枚になるのでしょうか。

幅10メートル、奥行き15メートルほどの、やはり小石が敷き詰められた中庭は、暗くなりかけた雨の日の夕方5時というのに観光客の出入りでいっぱい。家の壁の高さ5メートルほどのところに2メートルほどの長さのベランダがありました。ジュリエットが恋の独白をしたという舞台です。それは意外に小さく質素なものでした。

こんな相愛の二人も、ジュリエットのキャブレット家とロミオのモンタギュー家の仲の悪さが因となって悲運につながっていきます。二人を助けようとした司祭が仕組んだ試みが、ちょっとした行き違いで、ロミオはジュリエットの眠る墓場で毒薬を飲み自殺、仮死状態から目覚めたジュリエットはロミオの短剣で胸を刺し後を追う。事の真相を知り悲嘆にくれる両家は、ついに和解するとストーリーです。物語は対立する二つのグループと、それに翻弄され悲しい結末へと至る恋人たち、という時代を越えた普遍性を含んでいます。



ジュリエット像

そのベランダの下近く、中庭の奥には2メートルほどの高さのジュリエット像が雨に濡れていました。時の経過で少し黒みがかかった像は、訪れる人が触った部分だけが金色に浮き出

いました。若い女性群が次々と像の前に立ち、カメラにポーズを取っていて、ジュリエットの手やふくよかな胸に触れている人もいました。

実は、このベランダもジュリエット像も、戯曲が発表され人気を博した後になって作られたものだといいます。さらに言えば、作者のシェクスピア自身が、実際にここに来て作品を書いたのではないという説もある。歴史上あった物語を原典にして作品を書き上げたというのです。「ロミオとジュリエット」に限らず、小説、戯曲、映画が世に出て有名になってから、その舞台が作品の内容に合わせて作られる、いわば“町おこし”といったケースは多いのです。

### 「ハムレット」

同じシェクスピアの作品に四大悲劇の一つ『ハムレット』があります。その舞台デンマークのクロンボー城を訪ねた時のことです。首都コペンハーゲンから近郊線でヘルシンゴーへ。駅から10分あまり歩くと、バルト海の岸辺にそびえるクロンボー城（別名エルシノア城）に着きました。入口付近にはデンマーク国旗が高く風になびいています。城はちょうど片仮名のロの字の形をして、真ん中は中庭になっている。その石畳を舞台に、夏には野外劇『ハムレット』が上演されてきているとのことでした。



クロンボー城

私はまずハムレットが父王の亡霊を見たという塔の上に立ってみました。小説では寒く、暗く、不気味な荒々しい冬の城のイメージで描かれていますが、初夏のスカンジナビアの空はあまりにも青く澄み、カモメものどかに飛んでいました。紺青の海を挟んですぐ向こうにはスウェーデンが望めます。

私は小説のイメージを保ちながら、塔から降りると城の中の展示室から教会へ、さらに薄暗い地下壕まで歩を運びました。でも自分一人での探索では、ハムレットと母親（王妃）との会話はどこの部屋でなされたのか、ポーニアスの刺された事件現場はどこなのか等はわかりません。そこで入場料を払った受付に再び戻ると、その日の責任者らしい男性に聞いてみました。すると、両手を広げジェスチャー豊かに話す氏からは予想もしなかった言葉が返ってきたのです。

「Nobody knows!（誰もわかりませんよ）」。氏の話しっぷりからは「そんなこと言ったら、そりゃ無理ってもんだぜ！」といった少々くだけた訳が合うでしょう。

なんとも“名言”です。だって架空の話の舞台がどこかはわかるはずはないからです。それでも、これまで書かれてきた訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もあります。観光地としてはそこまでサービスしないと訪問客の期待に応えられないからなのでしょう。

物語が、あるいは映画が売れてその舞台が観光地化するのはどこにでもある流れです。それはそれで人々に想像の空間と夢を与えてよいことなのかもしれません。

### 「カルメン」

スペインを舞台にした小説「カルメン」は、フランスの作家のプロスペル・メリメによって書かれた中編小説。マラガ大学に留学していた2002年、私は物語の舞台セビリアを訪れました。「カルメン」や、ボーマルシェの戯曲「セビリアの理髪師」の舞台となったセビ

リアは闘牛、フラメンコの本場です。市の端を流れるグアダルキビル川は、コロンブスを初めとする大航海時代の立役者が、さらには約400年前、仙台伊達藩の支倉常長が足跡を印しています。

小説の舞台の一つは現在のセビリア大学。建物は18世紀に建てられた旧王立タバコ工場でした。

——スペインを旅行中の考古学者は今は獄中にいる山賊ホセを知る。ホセは形見の銀メダルを母親に渡してくれと学者に頼んだのち、懺悔話を始めた。それは、純情な青年が情熱の女カルメンに翻弄され、闘牛士や彼女の情夫、果ては彼女まで殺してしまう悲しい物語だった。

人間の本能の奥までえぐるような、ときにドロドロとしたものを流しながら語られる男女の愛。それは、現実を超えたものでありながら、誰の心の奥にも潜んでいる感情、本能を、ホセとカルメンの言葉と行動を通して吐き出させています——

日本語では文庫本で100ページほどの短編です。物語のあらすじを思い出ししながら、今は大学の法学部となっている建物の事務室の女性に、ホセとカルメンの最初の出会いの場所を尋ねてみました。

ところが——。

「エッ！ そんな話 は知りませんねえ」との意外な返事。

「ホラ、『タバコ工場の入り口で……』と、小説には書いてあるんですけど」



セビリア大学の正門

「じゃあ、きつとこの大学の正門のところじゃないかしら」

勤務時間外で事務室にはほかに聞ける人もいない。学生たちもまだ夏休みで構内にあまり見あたらない。日本では人気のある小説も、地元では意外にこんなものかもしれません。

あの名著「ドン・キホーテ」も、前・後編を完全に読み通したことがある人はスペイン人でもそんなにいないといえます。ひるがえって「源氏物語」を読み通した日本人もそんなに多くないのと同じことかもしれませんが……。

それでも、大学を取り囲む塀の壁には、セラミックで作られた「タバコ工場」との掲示が今も5～10メートルおきにあり当時を彷彿とさせていて、原作の情景を映し出していました。

最初に戻り、今年は、日本でもNHKのテレビ番組「花子とアン」をはじめ、いろんな企画が生まれ、旅行社はカナダへのキャンペーンをしています。でも、プリンスエドワード島は別として、訪問時、皮肉にもカナダの一般市民の間ではそれほど意識が高くないのには驚いたものです。

成田から現地への直行便はありません。乗り換えのためにトロントで一泊した際のことです。空港からホテルまで乗ったタクシーの運転手は、私のカナダ訪問の目的を聞くところ言ったのです。

「えっ グリーン・ゲイブルズって何ですか？」。わざわざ東京から訪ねたこちらが拍子抜けするような質問だったのです。

文学作品の舞台にもいろんなケースがあり、その地域にもいろんな人がいて、予想外の反応があるというエピソードのいくつかをご紹介します次第です。